

APF を塗布することが脱灰菌に対する効果的な治療法となる可能性を示唆している。今後、口腔内装置を用いて、加温 APF の脱灰菌質に対する in vivo における再石灰化促進効果を  $\mu$  CT を使用して解析する。

### 3. 地域高齢者の口腔 Candida 菌の分布状況と関連要因の解明

○佐藤 俊郎, 相澤 文恵\*, 木村 重信\*\*, 岸 光男

口腔医学講座予防歯科学分野, 人間科学科心理学・行動科学分野\*, 微生物学講座分子微生物学分野\*\*

背景・目的：近年、我が国の高齢化は都市部にも及び、高齢者の口腔保健は遠隔地のみならず、日本全体の課題となっている。高齢者の口腔に悪影響を与える口腔微生物の 1 つに Candida 菌が知られている。Candida 菌は粘膜症状の誘因となることから、高齢者の口腔内における分布、頻度及びその関連要因を明らかにすることは重要である。我が国において、外来受診者の口腔 Candida 菌の検出頻度を報告した例は散見されるが、地域住民に対する例は少ない。そこで本研究は口腔 Candida 菌の分布を把握するとともに、それに関わる要因を検討することを目的とした。

方法：岩手県沿岸に位置する町において、60 歳以上の住民 266 名（男性 115 名, 女性 151 名, 平均年齢  $72.3 \pm 7.0$  歳）から舌背の擦過試料を採取し、クロモアガーカンジダ培地 (CHROMager™) に接種、培養後、Candida albicans と Non-albicans に弁別して Colony Forming Unit (CFU) /ml を算出した。対象者を 60～69 歳 (96 名), 70～79 歳 (126 名), 80 歳以上 (44 名) の 3 群に分類し、性別、年齢群、義歯の使用状況による Candida albicans と Non-albicans の検出頻度ならびに菌量を比較した。

結果：各口腔 Candida 菌の検出頻度は C. albicans が総対象者中 53.4%, Non-albicans が総対象者中 23.7% であった。また、266 名中、少なくともいずれかの口腔 Candida 菌が検出

された者は 162 名, 60.9% であった。1 試料から検出された口腔 Candida 菌種の組合せ例では、C. albicans のみ検出されたのが 61.1% と最も高い割合で、次いで多いのが C. albicans と C. glabrata の 2 種の組み合わせで、23.5% であった。C. albicans の検出率に年代、性別、義歯の使用による差は認められなかったが、Non-albicans の検出率は 80 歳以上の者 ( $p=0.013$ ), 義歯使用者 ( $p<0.001$ ) で有意に高かった。一方菌量の比較では、C. albicans が、80 歳以上の者、義歯使用者で多い傾向にあった ( $p=0.100$  および  $0.053$ ) のに対し、Non-albicans にその傾向はなかった ( $p=0.871$  および  $0.463$ )。また、義歯使用者において、C. albicans, Non-albicans とともに菌量と喪失歯数との間に有意な相関 (Spearman の  $\rho =0.400$ ,  $p<0.001$  および  $\rho =0.375$ ,  $p<0.001$ ) を認めた。考察及びまとめ：C. albicans は 60 歳までに定着がほぼ終わっているのに対し、Non-albicans は、60 歳以降の晩期に新たに定着することが示唆された。また、C. albicans は高齢や義歯の使用、さらに菌の喪失に伴う義歯床面積の増加により量的に増加する傾向にあることが示された。